野鳥の日記から

野田豊子

庭のアカシヤの木に野鳥がきて、巣をつくったのは一九六五年だった。それは、わが家の末っ子が生まれた年でもあっただけに、深く印象づけられている。ここ藤野は札幌市の郊外、しかも小鳥の村で有名な藤の沢小学校の校下でもあるので、野鳥の往来は、なかなか盛んである。子供達とともに、いつのまにか父兄も野鳥に対する関心がたかまり、冬になるとバード・テーブルをおく家も少なくない。

わが家でも十年ほど前から野鳥達とはつきあっているが、折りにふれて断片的にメモしたものの中から、野鳥の横顔をスケッチしてみたい。

≪アカハラのスケッチ≫

一九六五年七月八日　先日来きていたトリが、庭のアカシヤの梢で交尾しているのをみた。もしかしたら、近くに巣を作るのだろうか。

七月九日　庭で隣りのS夫人とトリのことを話していたら夫人は、すでにアカシヤに巣ができているという。なるほど、アカシヤの木の上方に、それらしいものがある。

七月十一日　トリが、ジーッと、巣についているのをみた。

七月十五日　朝、トリがいず心配した。しかし元気な鳴声がして、九時頃巣にはいった。図書館で調べたところ（その頃、わが家には野鳥の詳い図鑑がなかった…）、このトリはアカハラらしい。

七月十六日　おひる頃、巣をみたら親鳥のきれいな尾がみえた。夕方、メスらしいのが巣にはいり、そこにオスらしいのがきた。オスはメスにくらべて体も一まわり大きく、尾も長く、尾と腹との間の褐色の斑点も多くはっきりしている。

七月十八日　メスとオスとが、代わるがわる巣にはいる。

七月二十五日　アカシヤの下で舌うちして、安全な仲間であることを知らせて様子をみに行く性か（本当にトリがそう思っているかどうかはわからないのだが…）、傍に行っても巣の中でおとなしくしている。尾が動かず静かにしている。

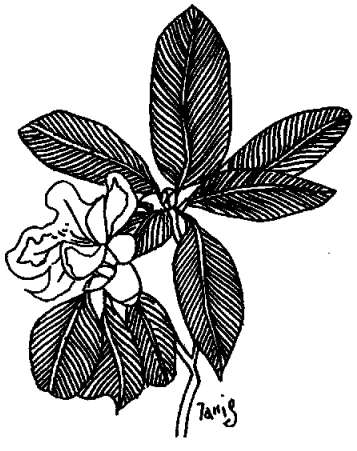
七月二十六日　親ドリがミミズを拾っているので、卵がみえるかと思って行ってみたら、メスらしいのが巣にいた。オスがメスに餌をはこんでいるらしい。ヒナはまだらしいのだがわからない。

七月二十七日　夕方親ドリが巣をはなれたらしいのでのぞいてみたら、ヒナが四羽いた。

七月三十日　もう子アカハラのピーピー鳴く声が、木の下でいつも聞こえるようになった。親ドリは何度も芝生におりてきては、口にあふれるほどミミズを運んでいく。

この後、日付ははっきりしないのだが、月が変わってまもなく、トリ達は巣立って行った。

親ドリが用心ぶかく、キッキッと鳴きながら、子トリもチッチッと呼びながら、巣からだんだんはなれて行っ



た。親ドリの声と子トリの呼び合う声が一日していると思ったら、つぎの日からはもう全く声がしなくなった。

× ×

「アカハラは、北海道では平地山林でふえる。そして美しい声でなく。その美声は キョロン キョロン ジー（原色・日本鳥類図鑑より）」、ということになるらしいが、もう少し軽やかに聞こえた。ともあれ、これ以来アカハラとは、すっかり声馴染み…（そんな言葉があるだろうか。姿を確認して声も聞いたもので、こんどは声だけ聞いてもアカハラとわかるようになってしまった）になり、六月末か七月はじめには、いつもこのあたりで聞かれる。

以前から札幌では、カッコウは五月二十日すぎが初鳴きの日であるとは有名で、いままでも少しのずれはあるとしても二十一日すぎると、いつかいつかと待たれる。六月末のさわやかな新緑の風にのって聞こえるアカハラの声も、私どもにとってはなつかしいものとなった。もしかしたら、あれは家で生まれたアカハラの子孫かも知れない、などと勝手に想像している。

夏に野鳥とつき合うのは団地の中であるだけに、なかなかむずかしい。それに宅地化されたとはいえ森や林がかなりまわりに残っているので庭先よりも、やはり森に行ってしまうようだ。しかし今夏は、クロツグミがどうやら近くでヒナをかえしたらしく、夕方よくオスやメスがミミズをとりにきた。これはわが家だけではなく、友人の家でも確認している。

シメも、折り折り訪れてきている。近所の家で自然石を利用して野鳥の水のみ場を作ったところ、シメがやってきては、水あびまでしている。

ナナカマドの実が赤くなり、山々も色づいてくると札幌の秋は駈け足で冬に近づく。

十月の声を聞くと、つぎつぎと近くの山々からの初雪の便りがとどく。今年も例年より一日早く十月八日、手稲山に雪が降ったとのことだ。雪の季節こそ、野鳥とのつき合いの深くる季節だ。

はじめの頃は、庭の隅に植えてあるアカシヤとかシラカバの木のそばに、豚の脂身をつけて野鳥の訪れるのを楽しんでいた。しかし冬もたけなわになると、家のまわりは屋根からおちた雪で小山ができ、すぐそこにみえている庭の木まで行くのに、スキーをつけなければ行けなくなる。それで年々、小鳥の餌台（バード・テーブル）は家近くなり、数年前からはテラスの戸の外、一メートルとはなれていないところに作るようになった。

つけはじめは、まずスズメが近づいてくれる。シジュカラやヒヨドリが近づいてくる頃になり、雪の本格的な季節となるとだんだん珍しい客達もくるようになり、バード・テーブルのメニューを用意する者としては忙しい日々がつづく。夏の間に食べたカボチャの種や、畠でとれたヒマワリの実、それにリンゴやナシ、豚の脂身とパンは必ずつける。

まるで小鳥のレストランだわと、嬉しい悲鳴をあげながらコック長である私は、朝起きると、まずバード・テーブルをみる。テラスの戸をあけ（といっても凍りついたり、大雪であけずらいときもあるが）、家の中からパンやリンゴをきざんだもの、それに針金で固定してある看板料理の脂身がきれていないかを確かめる。トリ達は雪に半ば埋もれたレンギョウやライラック、それに枝を一杯に広げているサクランボウにとまって待っている。私が餌を出す音でとびたったエゾアカゲラも、シラカバの幹にへばりついておとなしく待っている。

硝子戸から一メートルとはなれていないところに野鳥達がやってくるもので、トリ達のおしゃべりやけんか、それにトリ達のテーブル・マナーまで、コック長をはじめ窓硝子の内側ではゆっくりとながめられる。

野鳥には、それぞれ嗜好があって、脂身の好きなのはシジュウカラやエゾアカゲラ、パンや御飯の好きなのはスズメ、そしてリンゴが大好きなのはエゾヒヨドリという風に見受けられる。しかもわが家でバード・テーブルを作りはじめの頃は、割りとその嗜好がはっきりしていたように思う。ところがこの頃では、野鳥の嗜好がだんだん変わってきたように思う。スズメは決してはじめは脂身など見むきもしなかったのに、スズメ以外の野鳥を呼ぶため脂身だけつけておいて、それが成功した記憶もあるくらいなのに、この頃は年々スズメも脂身好きになり、御飯やパンがあっても脂身を食べるスズメまでみられる。この頃、ヒトの子が脂こいものを好むと同じに、トリの世界でも食生活に変化をきたしているのであろうか。

「一体、野鳥はどうしてバード・テーブルの餌をみつけ、そして食べるのだろうか」ということは、私達窓の内側からながめているものの興味をそそる。トリは大変目がよいので、まあみつけたとしても、天然にはブタの脂身がごろごろころがっているわけでもないのに、どの

ようにしてそれがおいしいものだとわかるのであろうかということは、いまもってわからない。

しかしこの頃、ペットのセキセイインコなどを通してみたところでは、トリという生き物はどうやらすごく好奇心が強く、積極的になんでもつっついてみる性質があるようだ。

まず考えて行動しているのではなくて、行動を通して選んでゆくのであろうか。それにしてもここ十年ほどしかみていないし、いつも一定の条件というわけではないので、軽はずみには結論できないが、エゾアカゲラも主として脂身を食べるが、パンのデザートとしゃれこんだり、ヒヨドリもリンゴだけではお腹がすきすぎるか、目を白黒させながらパンのかけらをのみこんでいる（しかし、まだ脂身は食べているのをみかけない）。先にも書いたように、スズメは確かに変化してきたように思える。

スズメといえば、或年嘴がワシのように曲ったスズメがいた。子供達は外見が強そうなので、いつもそのスズメがくるとワシちゃんワシちゃんとよんで喜んでいたのだが、どうやらこのワシちゃん、どちらかというと、のけ者にされ勝ちなのだ。そのうえ冬の終わらぬうちにこなくなってまった。野鳥のことに詳しい小鳥の村の村長さんのOさんの話しによると、ワシのような嘴は、とかく餌が食べづらいので、なかなか長生きできないとのことだ。

近くでみていると、トリの羽の色とか形など、ことのほか詳しくみえるので雌雄の区別のあるものは、はっきりわかる。

エゾアカゲラは、エサをついばむ。はでなコツツツ……という音で、外をみなくてもきていることがわかるのだが、その音で外をみると、頭の上の赤ベレー帽のような毛のあるのがオスで、ない方がメスなので、〃キツツキオジサンがやってきましたよ〃、とか〃キツツキオバサン〃だなどと、硝子戸の内側から歓迎できるわけだ。エゾアカゲラより一まわり大きく、全身がうすみどりのきれいなヤマゲラも年によってはよくくるが、これも頭の赤いベレー帽がオジサンで、ノウ・ハットの方がオバサン、そのうえ、その長い長い舌でペロリ、ペロリとなめるように脂身を味わっている様子は、出かけるときの迫るのも忘れて、親も子も朝の一時、トリに魅せられてしまう。

図鑑から抜け出してきたようネ、と感心すると、トリが図鑑ににているのではなくて、図鑑がトリににているのだと、子供達に笑われるが、末知の客がくると紳士録ならぬ図鑑をとり出してとくとくらべ、本名をさがし出すのがまた楽しい。全く班点とか、その色など、色のはっきりしているものほど、どれをみてもキッチリと決まっているように見える。

ミヤマカケスやレンジャクは、なかでも派手な色をしている。ミヤマカケスは体の大きい性もあって、脂身もシジウカラの食べるのとは比べものにならないほど大きいのをごっぽりと平げて行くし、パンもリンゴもガサガサと音がするほど食べ、そして運んでいく。そのうえミヤマカケスは、灰色にコバルトブルーのアクセントのはいった、しゃれた羽色なのに似ず、可愛げない声で鳴くし、テーブル・マナーが荒っぽいので好まれざる客のようだ。

それにひきかえレンジャクは、群でくるので、餌は一度にずいぶんと減るのだが……その美しい羽色と、可愛いヒーヒーという声、なんとなくお代りを、とすすめたくなるようなトリだ。カンムリのような冠毛が風にそよぐのが、また可愛い。全体は、ぶどう色がかった灰色で黒みがかった翼のところどころに、たっぷりと色を含ませた筆で書いたような紅色があり、尾の先も絵具をとかした皿で、ちょっとつまんで染めてきたかのように赤いのがヒレンジャクだ。

キレンジャクは翼の中にも黄色が多いし、尾の先はこれまた真黄の絵具皿で染めたように黄色い。そのうえキレンジャクもヒレンジャクも、のどもとと目のところに真黒のアクセントがあり、目のところは全くアイラインを入れたお嬢さんのようにチャーミングなのだ。

いつもキレンジャクとヒレンジャクはまじって群で行動するようで、体形はキレンジャクの方が一まわり大きく、群の中の数もキレンジャクの方が多い。このあたりでは、三月半ば頃一番多くみられる。ツタの実やヤドリギの実のようなやわらかい実を好んで食べるようだが、バード・テーブルでは、主としてリンゴを食べ、パンもすこしたべる。

わが家のバード・テーブルにレンジャクがあらわれる頃は正しく春の前ぶれで、折りしもわが小鳥のレストランは、もっとも盛況な折りだ。嘴の太いシメや全身銹色（さび）の美しいハチジョウツグミ、エゾヒヨドリにエゾアカゲラ、時には渡りの途中なのか、スズメによくにて一まわり大きいアトリの群のきびきびした姿もみることができる。黒っぽい体ではあるけど、だいだい色がかった美し

い嘴をもち、グライダーのようにスーッと降りてくるムクドリなど、千客万来の中に、レンジャク達はさらに賑やかに訪れる。

渡りの前なのか、レンジャクはコロコロに太っている。わずかの広さのわがレストランテーブルの上には乗り切らず、雪穴のようになったテーブルの下までもぐりこんで、台の下にこぼされたのをつつましく召上がるものもいる。レンジャクは群で行動する性か、全体として食べているときは落ちついていて、硝子戸にぴったりくっついて、五〇センチ先のトリをみていても、食べはじめると、ゆるりと落ちついている。しかし折り折り司令を出すトリがいるのか、どうかしたはずみに一羽がとびたつと、あわててとびたち、時には硝子戸にぶつかったりするほどだ。

硝子戸といえば、あるときこの硝子戸をあけておいたら、家の中まではいってこないかしらと戸をあけて待ったところ、予想どおり家の中まではいってきた。群で行動する故にきっと安心して大胆に行動しているのだと思うが、気ぜわしげに一口食べては首をくるくる動かしては、また一口とついばむシジウガラとは対照的なマナーのようだ。

レンジャクはいつも群で行動して、二、三十羽ずつ動いているようなのだが、どうしたわけか折り折りひとりさすらうのもいる。いつも群とはなれて違う時間にくるヒレンジャクがいて、ふしぎに思っていた。すぐ近くの友人宅のテーブルにも、やっぱりひとりでくるという。群でくるときは先客がいても、レンジャク様一行の貸切りといった感じになってしまい、先客はとび立ってしまうのだが、ひとり客となるとそんなわけにはいかず、かなり荒っぽいマナーで他のトリ達を追っぱらって、リンゴにかぶりついているといった感じだ。なぜひとりさすらっているのかわからないけど、群のレンジャクは渡っていったのか姿を見せなくなってからも、かなりいつまでも凛々としていた。ついにはこなくなったので、後はどのようになったかわからない。

どのようにして餌がバード・テーブルにあるのを知るのだろうか、広い空、しかも世界中から渡ってくるトリ達の間に口コミでもあるのかと思うほど、例年、野鳥は訪れてくる。私のところでは、ついぞ見かけないのだがこの団地内でもコウライキジがとんでくる。藤の沢小学校の校庭のバード・テーブルは家庭のとは違って大がかりで、一度に沢山の客が訪れてもよい大がかりなレストランのようなもので、そこにはいろいろの鳥がくるそうだ。

エゾヒヨドリやエゾアカゲラなどは一度に何羽もくるし、そのうえイスカが松ボックリをパシリパシリと割ったり、大きなキジのオスやメスがゆったりと校庭を歩くと、忙しい校務もひとやすみして、見入ってしまうのですよ、と校長先生は話して下さった。

また、団地から一キロほど奥で農業をしているAさんの家では、トウキビをまく頃キジの親子がやってくるそうだ。とても可愛いけど、トウキビをほじって困るのですよ、とも洩らしていた。先年、四月はじめ、キジの生態を調べているニュージーランドのW氏がこのあたりを尋ね、キジには会えなかったが、キジの生息地の様子を写真におさめて帰られた。W氏は、キジを追って世界のあちこち（ソ連・トルコ・韓国など）をまわられたそうだが、藤野の様子もとても気に入られて帰られたのに、このあたりもだんだん山野が無計画に宅地化されて行くのは心痛む思いだ。

春の早い年だと三月の半ばをすぎると、ぶどうだなをすっぽりと埋めつくしていた雪も目に見えてへってきて、南向きの日当りのよいところでは、青い草の芽がみえてくる。この頃になると、わがレストランの最初の頃からの常連のシジウガラがとてもきれいになってくる。首すじから背にかけて美しいグリーンがかった玉虫色に輝き、この小鳥達が春めいてきたことを語ってくれる。

バード・テーブルには、三月末になると目立って客は少なくなるが、どの鳥も春めいて、いつも仲良くやってきていたエゾヒヨドリなども、目のまわりがポーッと桜色になってくる。四月になると、もうトリ達は、せせらぎのかなでる音にさそわれて、ずっと山里に移動するようで、わが小鳥のレストランは店じまいをする。

（主婦）